

真宗文庫

# 地獄と極楽

宮城 顛

東本願寺出版

真宗文庫

---

# 地獄と極楽

宮城 顛



---

東本願寺出版



# 目次

## 第一章 善と悪

一、地獄という言葉の意味	1
二、のがれえぬ現実	5
三、世間の善悪	8
四、我執をつのる	10
五、たとい正義たりとも	13
六、まいらせ心	16
七、七仏通誠の偈	18
八、無明	21

## 第二章 等活するもの

一、生死一如	25
--------	----

二、生と殺	29
三、生命の重さ	31
四、逃れがたい罪	35
五、地獄の名	37
六、等活地獄	40
七、最後の逃げ場	42
八、常に新た	44

### 第三章 人間として

一、一生は尽くとも	48
二、黒縄地獄	51
三、黒の意味するもの	54
四、自業自得	56
五、衆合地獄	58
六、裁きの心	61
七、思いのとらわれ	63
八、事実を受けとめる	65

九、阿鼻地獄	68
--------	----

#### 第四章 無明の深さ

一、法然上人における「悪人」	71
二、親鸞聖人における「悪人」	73
三、意思の参加	77
四、殺生罪	80
五、罪の自覚	82
六、信心の智慧	85
七、法との出遇い	88
八、私の地獄	91

#### 第五章 三悪趣

一、大きな願い	95
二、無三悪趣の誓い	98
三、餓鬼	101

四、具足の世界	104
五、幻の楽しみ	106
六、天上界	109
七、畜生	112
八、慙愧なきもの	116
九、思いに閉じこもる	118

## 第六章 地獄一定

一、国土の発見	120
二、独立者	123
三、死ぬ日まで	126
四、浄土にめぐめる	129
五、願生心	132

## 第七章 たしかな歩み

一、苦と楽	135
-------	-----

二、存在のあいまいさ	139
三、心塞意閉	141
四、心得開明	143
五、得涅槃分	145
六、煩惱に徹する	147
七、生死即涅槃	150
八、生死の重さ	153
九、懺悔と讃嘆	156
十、たしかな道	158
参考 八大熱地獄	164
あとがき	166

## 凡例

- 一、本文中の引用で、出典が（聖典）とあるのは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。
- 一、引用文中の旧漢字・旧仮名遣いは現行の字体・仮名遣いに改めました。





## 第一章 善と悪

### 一、地獄という言葉の意味

この地獄と極楽という言葉は、宗派を問わず、また仏教徒であるなしにかかわらず、私たち日本人の生活の中にとけこんできた言葉でありますけれども、その大きなものになっておりますのが、源信僧都げんしんそうずの『往生要集』おうじょうようじゅうでございます。

源信僧都の『往生要集』が世に出ましてから、それをとおして地獄・極楽という、そういう言葉と申しますか、観念と申しますか、そんなものが私たち日本人の先祖の生活の中に、ずっと流れてきているわけでございます。

『源氏物語』などの文芸作品の中にも、『往生要集』をとおして、そういう

言葉が出てくるわけですから、地獄ということが、江戸時代にとくに実体的に説かれてきたということがございまして、その反動といえますか、明治維新以後、理性的なものの考え方というものが広く入ってくるにつれて、地獄ということが荒唐無稽な、問題にならないナンセンスなものとして、逆に無視されてきたということがあります。

ところが、この地獄という言葉が近年になりまして、ただ仏教徒ということに限らず、いろいろな思想的な立場の方々によって用いられてくるようになりまして。たとえば、地獄という言葉が標題についている書物だけでも、いろいろと出版されています。

つまり、今日私どもの生活が、未来へのバラ色の夢というものがもてなくなってきたような、まあ終末論ということもいわれているわけですから、その終末ということが、何か心に響く言葉として感じられるような、こんな生活になってきまして、いままで未来へ目を向けて生きてきた私ども

が、未来というものから、もう一度、いまというものを見つめなおさなくてはならぬということになってきた。

いま現にある自分の事実をほりさげていくということが、もう一度求められてくるようになりまして、そこに地獄という言葉が、私たちの現実をもっとも深く言いあてる言葉としてよみがえってきている、そういうことがあるようにございます。

地獄という言葉この言葉自体の意味につきましては、さまざまな經典の言葉を集めた『諸経要集』しよきやうようしゅう という書物があるのですけれども、唐時代の「道世」という人が編纂したのでありますが、その『諸経要集』によりますと、地獄の「地」について「地とは底なり、いわく下底」と。つまり、私どもの生命いのちのもっともどんだ底、存在のもっとも根底ということ。そして「獄」とは、結局、「自在を得ず」という意味だそうでございます。

この獄という字の部首は、ケモノ偏ケモノ偏でございますが、このケモノ偏は

「犬」を表す。だから、獄ク という字は、二匹の犬が争い合い、わめき合っているという、そういうことからできた文字だということが辞書に出ております。

けれども、獄という言葉の意味には、「拘局」ということがある。拘ク というのは「拘置する」。引き止められる、縛りつけられるということ。それから局は「局限」。局分と申しますか、一つの状態に押し込められるということ。

つまり、獄ク とは、一つの状態に押し込められ、そこに縛りつけられているという、そのような意味が地獄という言葉です。

## 二、のがれえぬ現実

そこに「自在を得ず」。つまり、ある意味で自由気ままに夢をのばして、く、そういう私たちの心をいちばん深いところから縛りつけている。私を現にこのような在り方に縛りつけている。そういうものを表す言葉が、地獄という言葉であるといえるかと思えます。

ですから地獄について、どこかにそのような場所があるかのように思われるのですが、たとえば『往生要集』の中で源信僧都が、地獄についてお書きになるとき、いちばん中心の、依りどころとしておられる経典が『正法念処經』<sup>ぎょう</sup>であります。その『正法念処經』の中に、「汝は地獄の縛を畏るるも、<sup>なんじ</sup>これはこれ、汝の舍宅なり」という言葉があるわけでございます。

つまり、地獄というのは、どこか未来の遠いところにある世界ではない。この私が現に生きているこの場である。つまり舍宅<sup>おそ</sup>というのは、私の具体的

な生の場、私が具体的に生きてゆくときの場所であり、そこにおいて私の生命は具体的なものとなる。そういう場が地獄である。『地獄』の自覚において、私の生命は、はじめて具体的なものとなる。

このことを、もっとも自覚的な言葉でいいきられたのが、ご承知のように、親鸞聖人の「地獄は一定すみかぞかし」〔『歎異抄』聖典六二七頁〕という言葉だといっているかと思えます。

地獄というものが、どこかにあるということではない。私というものほんとうの相を、<sup>すがた</sup>根底からほりおこしていくところに出会うものが、地獄なのである。ですから、地獄ということ<sup>を</sup>ぬきにして私ということはありえない。そういう意味に、地獄という言葉が使われているわけでありませう。いうならば、私というものが地獄だということですね。私のもっとも主体的なその生の根源が地獄だ。そのような意味に、地獄という言葉は表されているのであります。

ですからある方は、地獄とはのがれえぬ現実世界ということだとおっしゃっておられます。つまり、私どもの現実世界というものを、見きわめるところに出てくる言葉ですね。

地獄とは、そのような意味をもつわけですが、そこにやはり「拘局」というように、そこに拘置される、縛りつけられるという意味があるわけですから、ここに、のがれえぬ現実世界というものの根底に、私どもがこの生命においてもっておりませう罪というものをふまえて、地獄という言葉が出ていることを知らされるのであります。

罪ということと、地獄ということとは、切り離すわけにはいかない言葉なのでありますけれども、ただそこに、それならそれでいったい仏教においていうところの罪とは何か。そういう問いがひとつ出てくるわけであります。